

【研究論文】

通常学級に在籍している 気になる子の人物画描画特徴と推移

落合 利佳*・本吉 大介*

キーワード：小学生 人物画 気になる子

1. はじめに

通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は6.5%であるという報告（文部科学省2012年）¹⁾をはじめ要支援児童の割合は10～30%以上であるという報告^{2),3)}も散見され、通常学級において要支援児童は近年非常に高い割合を示しているといえる。また、子どもの発達の遅れやアンバランスさについてもいくつか報告がされており、その要因として子どもを取り巻く環境の変化が指摘されている^{4),5)}。専門機関においても発達障害の可能性のある児童の受診希望数の増加に対応しきれていないのが現状である⁶⁾。発達検査は発達障害児や保育や教育現場で「気になる子」への対応・評価のうえで重要な情報となるが、専門機関で用いられるWISC-IVや新版K式発達検査2001などの発達検査はその実施・評価に検査道具に加え専門的な知識やスキルを必要とする。また、KIDS乳幼児発達スケールや津守・稲毛式乳幼児精神発達検査などの記入式発達検査は簡便ではあるが、普段から対象児に関わる保護者・保育者による主観的な評価によるものであり、評価者の観察力などの影響を除外することが難しい。

グッドイナフ人物画知能検査（DAM）はGoodenough⁷⁾によって1926年に発表され、その後、Harris⁸⁾による改訂を経て、本邦では1977年に小林⁹⁾によって標準化された人物画（男子像）描画を用いて評価する検査法である。人物画は50項目ある採点項目を基準に基づいて点数化し、得られた点数を換算することで発達年齢（DAM-MA）を得ることができ、このDAM-MAを生活年齢で除することで人物画知能指数（DAM-IQ）を算出することができる簡便かつ客観的な知能検査法である。

本研究では、小学校入学時から3年間、担任からみた「気になる子」の「気になる内容」の

*大阪大谷大学教育学部

推移と人物画描画特徴について追跡調査を行ったので文献的考察を加えて報告をする。

2. 研究方法

1) 調査対象および実施時期

調査対象は平成 25 年度に大阪府内公立 A 小学校に入学した児童とし、そのうち特別支援学級に在籍している児童および、通級による指導を受けている児童を除いた 53 名とした。調査期間は 25～27 年度とし小学 3 年生まで追跡調査を行った。調査内容は、人物画描画検査を入学年度から 3 年間にわたって毎年 2 月下旬に実施した。また、同時に、担任に対し「気になる子」に関する調査を質問紙形式で行った。今回は対象 53 名のうち人物画描画と「気になる子」の双方の調査が 3 年間追跡調査で可能であった 21 名に対して分析を行った。

2) 人物画描画の実施と DAM-IQ 算出方法

人物画描画は、授業時間を利用し、筆者が学校に出向きに直接指示のもと実施した。

得られた人物画は 50 項目に関して採点を行い、得られた得点から DAM-MA に換算した。換算にあたっては「MA 換算表」を用い、そこから、生活年齢を基に DAM-IQ の算出を行った⁹⁾。

尚、本研究・調査を行うにあたって、学校責任者に研究目的、データのコード化などの匿名性の順守、管理の徹底、研究終了後データを破棄する旨を事前に口頭および書面で説明し了解を得た。また、児童・担任に対しても実施に当たっては任意である旨を説明し、同意を得られた場合のみ実施した。

3) 分析方法

DAM 採点項目、DAM-IQ など得られたデータから SPSS 12.0 for Windows を用いて統計分析を行った。有意水準は 5% とし、Mann-Whitney Test を用いた。また、採点項目の通過率に関しては小林らによる標準化データ⁹⁾を参考にした。

3. 結果

1) 入学年度の DAM-IQ (表 1)

入学年度の DAM-IQ を表 1 に示す。対象児童の入学年度の生活年齢 (月齢) は平均 88.5 ± 3.8 、描画発達年齢 (月齢) は平均 85.1 ± 12.6 、DAM-IQ 平均 96.1 ± 12.6 であり、これらの値

に性差はなかった。また、気になる子と気になる子を除いた児童（一般）の生活年齢、DAM-IQ、性差においても有意差を認めなかった。

個別には、2名で DAM-IQ が 70 後半と境界知能であった以外、残りの 6 名は正常範囲であり。明らかな知的な遅れは認めなかった（表 2）。

表 1 入学年度の DAM-IQ

	全体 (N=21)	男児 (N=10)	女児 (N=11)	気になる子 (N=8)	一般 (N=13)
生活年齢（月齢）	88.5±3.8	89.3±4.4	87.7±3.1	88.0±4.0	88.7±3.7
描画発達年齢（月齢）	85.1±12.6	83.6±9.8	86.5±15.1	79.0±7.6	89.9±13.8
DAM-IQ	96.1±12.6	93.6±10.3	98.4±14.6	89.0±9.1	100.0±13.3

2) 「気になる子」の「気になる内容」(図 1、表 2-3)

3 年間追跡調査が可能であった 21 名のうち、1 年生の時点で担任が「気になる子」として挙げたのは 8 名（男児 6 名、女児 2 名）、2 年生時点では 3 名（男児 2 名、女児 1 名）、3 年生時点で 4 名（男児 1 名、女児 3 名）であった。（表 2）また、「気になる子」は担任の交代によって毎年変わり、3 年間の間に「気になる子」として指摘されたのは 9 名（42.8%）であったが、そのうち複数学年で「気になる子」の指摘があったのは 4 名（表 1 No.1~4）、1~3 年生時の担任が「気になる子」として一貫して挙げていたのは 2 名（No.1、No.3）であった。「気になる子」は 1 年生時点で 38.0%（21 人中 8 名）、2 年では 14.2%（21 人中 3 名）、3 年生時点で 19.0%（21 人中 4 名）と入学年度が一番多かった（表 3）。また、「気になる」内容として、入

表 2 担任からみた「気になる子」の入学年度の DAM-IQ と「気になる」内容

No.	性別	DAM-IQ*	気になる内容		
			1 年生	2 年生	3 年生
1	女	89	学習、対人関係、コミュニケーション	読字・書字・計算	書字・計算・コミュニケーション
2	女	98	学習、対人関係、コミュニケーション	特になし	コミュニケーション
3	男	95	不注意、こだわり	不注意・こだわり	不注意・多動・コミュニケーション
4	男	78	学習、コミュニケーション	自信がない	特になし
5	男	76	不注意	特になし	特になし
6	男	102	不注意、衝動性	特になし	特になし
7	男	94	不注意、多動、衝動性	特になし	特になし
8	男	87	学習、不注意	特になし	特になし
9	女	96	特になし	特になし	計算

(*入学年度データ)

表3 「気になる子」割合の推移

気になる子	1年	2年	3年
人数(人)	8	3	4
男女比(男:女)	6:2	2:1	1:3
割合(%)	38.0	14.2	19.0

学年度は「不注意」が一番多く、次いで「学習」、「コミュニケーション」であり、3年時では「コミュニケーション」が多かった。また、1年生で「コミュニケーション」で指摘された児童(男児1名、女児2名)のうち女児2名は3年生でも同様に指摘されていた(表2、図1)。

3) 気になる内容と人物画描画の特徴(図2-4、表2、表4)

1~3年生の担任が「気になる子」として共通して挙げていた2名(No.1、No.3)の「気になる内容」は、No.1で「書字」、「読字」、「計算」、「コミュニケーション」また、No.3は「不注意」「多動」「コミュニケーション」「こだわり」であった。また、各学年の担任が気になる内容はほぼ一致していた(表1)。1~3年生時のDAM-IQは各々1年生から順に、86、71、78(No.1)、95、92、75(No.3)であり、正常から境界域であった(図2)。

主に学習面で気になるのと指摘があったNo.1の児童の人物画は、1、2年時の人物画で指の描画がみられなかった(図3)。指の描画に関しては、対象児21名中、1年生時の人物画で指の描画を認めなかったのは3名(No.1、No.2、No.8)で全員「学習」面で気になる児童であった。また、No.1以外の児童は、次年度以降は指の描画を認めており、担当学年の担任からも「学習」で「気になる子」として指摘はなかった(表2)。「指の数」の通過率は1年生時点で気になる子で38%、一般児童の62%であり、有意差は認めないものの気になる子で低い傾向にあった。2年時にはそれぞれ62%、63%と差がみられなくなったが、3年時で75%、92%と一般児童での通過率の上昇が著明であった。3年時で通過しなかったのはNo.2とNo.5であった(表4)。

不注意、こだわり、コミュニケーションが気になるNo.3では、1年生と3年生時にまゆや耳といった顔の周辺に関する項目の描画がみられなかった一方で、パターンの洋服の柄(イ

図1 「気になる内容」の推移(複数回答)

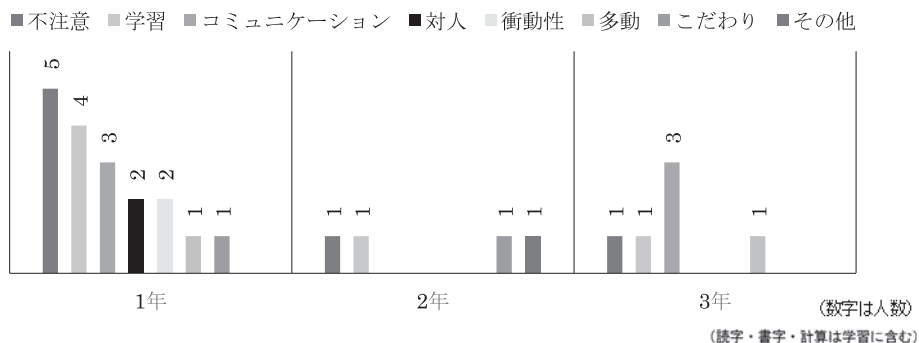


図2 DAM-IQの推移

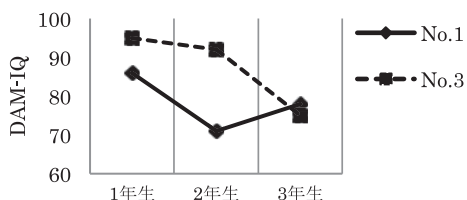


表4 「指の数」通過率の推移

	1年	2年	3年
一般児童 (N=13)	62%	62%	92%
気になる子 (入学年度) (N=8)	38%	63%	75%
全体 (N=21)	52%	62%	85%

ニシヤル) や付属品が丁寧に描きこまれているといったアンバランスさがみられた。また、毎年、描画タッチの極端な変化をみとめた (表5、図4)。

4. 考察

1) 「気になる子」の割合と内容の推移

今回の調査では、通常学級在籍の38%の児童が入学年度に「気になる子」であった。大阪市内の公立小学校7校の1年生のうち担任からみて「気になる子」の調査³⁾でも同様に、多い学校で35.5% (平均26.2%) の報告がされており、知的発達に遅れはないものの学習面、各行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が小学校1年で9.8%であった文科省の調査¹⁾と比較するとかなり高い割合にあることがわかる。文科省の報告では、学年が上がる毎にこれらの割合は減少する傾向にあったが、今回の調査でも2年時以降は激減しており、減少傾向がみられた。特に入学年度に「気になる子」の割合が他学年と比較して高くなる原因として、今中³⁾は同学年において児童の出生月の違いにより1年近い年齢差があること、就学前の集団環境の違いなどの影響を挙げている。本研究においては、実施時期が2月であるがこの時

図3 人物画描画の推移 (No.1)



図4 人物画描画の推移 (No.3)

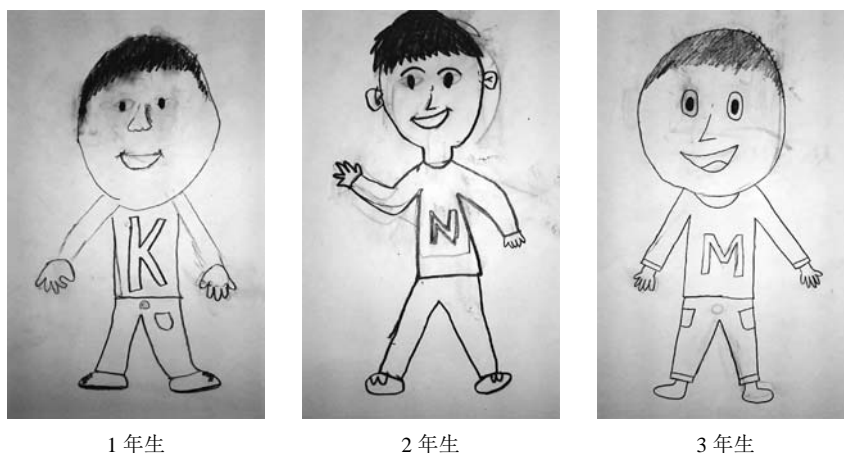


表5 No.3の顔の部位の通過の推移

	1年	2年	3年
眉	-	+	-
耳	-	+	-
瞳	-	-	+
鼻の輪郭	+	-	-
首	-	+	-

期においてこれだけの高い割合を認めていることは注目すべきことであり、また一方で同集団において特に「不注意」で「気になる子」を中心に2年生以降減少していることからわかるように、学習を含めた就学後の環境の変化への適応へは少なくとも1年以上はかかることが示唆される。このことから、入学年度は児童に45分間、教室で集中して授業に参加することに慣れさせることにも重きをおくと同時に、学習が始まる

前である就学前の集団環境であらかじめ指導しておくことが望ましいといえる。

また、本調査では、3年生の担任からみて気になる内容は「コミュニケーション」が中心で、女兒の方に多く指摘されている。学年が上がるにつれて児童間での遊びややり取りなどでのコミュニケーションスキルがより高度で複雑になっていくが、女兒では早い段階からこのスキルが要求される。3年生で指摘された女兒は1年生ですでにコミュニケーションに課題があると気づかれていたことからわかるように、女兒では早い時期から担任に気づかれやすいこと、入学年度に抱えているコミュニケーションの課題がその後も継続することが予想される。したがって、1年生でコミュニケーションに課題がある児童、特に女兒に対しては、早期から支援・介入をする必要があると考えられる。

2) 気になる内容と人物画描画の特徴

3年間継続して「気になる子」として担任より指摘を受けた2名(表1 No.1、No.3)は、DAM-IQの結果から明らかな知的な遅れはないと考えられた。気になる内容から、No.1は

「学習障害」、No.3は「注意欠如多動性障害」と「自閉症スペクトラム障害」にみられる特徴を有する可能性が示唆された。

「指の数」の通過率については小林の標準化データ⁹⁾では7歳6か月時で22.9%であるが、小学1年生を対象にした研究³⁾では67.8%という報告があり、今回の結果やこれまでの報告¹⁰⁾も合わせると、この標準化データが現代の子どもの描画発達の現状にあっていないことがわかる。

これまでの学習障害児に関する人物画描画研究¹¹⁾では「指の数」以外に「鼻」、「首」、「腕の位置」、「衣服」などで通過率が低いとの報告がされている。「学習」で気になると指摘されたNo.1では1,2年生時に指の描画がみられなかった。また、2年生時以降特に3年生の一般児童で9割に増加している一方で、気になる子において通過率がその後も低い傾向にあった。「指の数」を含む他の項目も合わせ今後検討する必要があると考える。

自閉症スペクトラム障害児を対象としたこれまでの人物画描画研究^{5), 12), 13)}では、頭部と胴体などとのボリュームなどの不均衡、顔は描けているのに体や手足が描けていないなどアンバランスさ、身体の細部への注意力の未発達などが指摘されている。「こだわり」、「不注意」、「多動」の指摘があったNo.3では、衣類の描写は付属品や模様も含めほとんど変化がなく「衣類」(物)への描写に「こだわり」がみられた。一方で、鼻、耳、眉、目(瞳)、首の描写が毎年一定しないなど「顔周囲」(人)の一貫した描写がなかった。描画タッチも、一貫性がなくの毎年変わり、「人」と「物」の描画において「興味もしくは注意の偏り」といったアンバランスが認められており、これまでの自閉症スペクトラム障害児の人物画研究の報告による描画特徴と一致する。また、渡邊¹³⁾は自閉症スペクトラム障害児の人物画を定型発達者との比較から、3つの類型：①形態水準や明細化度の高い、精緻な描写の人物画、②形態水準が低くバランスの悪い、稚拙な描写の人物画、③「外輪郭のみの人物画」に代表される簡素化された人物画、に分類しているが、この渡邊による分類では、No.3の児童人物画描画は①の特徴を有するのではないかと考えられる。人物画描画で①パターン的な描画(特に物)、②細かい細部(付属品など)の描写、③「顔周囲」と「衣類」のアンバランスさが見られた場合、「こだわり」「不注意」などの「行動面」と関連している可能性がないか注意する必要があると考えられた。すなわち、描画において「物」への固執やパターン的な表現(服装・付属物)が見られる児童に対しては、同時に顔(人)への表現にも注目し、「物」と「人」の表現にアンバランスさが認められる場合は、「こだわり」、「不注意」など自閉症スペクトラム障害や注意欠如多動性障害などの障害特性がないか行動観察を注意深く行う必要があるといえる。

5. 今後の課題

自閉症スペクトラム障害はその障害特性として環境の変化を苦手とする。また、注意欠如多動性障害は集中し続けることに困難を有している¹⁵⁾。小学校入学年度は、新しい集団、今までと違う生活リズム、学習の開始といった環境の劇的な変化がおこるため、新入学生、とりわけ自閉症スペクトラムの特性をもつ児童への負担は非常に大きい。また、注意欠如多動性障害のみならずの自閉症スペクトラムの特性を持つ児童が45分間集中し続けるためには大変な努力と配慮を必要とする。学習においても、1年生は文字・数といった今後の学習を進めていく上での基礎となる重要な期間である。したがって、特に低学年児童に対しての「気づき」には特に意味があるといえる。

今回、「気になる子」に対し支援が実際にどの程度されているかについては調査を行っていないため支援の実態は不明である。しかし、知的発達に遅れはないものの学習面、各行動面で著しい困難を示していると児童に対して、支援が必要と判断されているのは18.4%に過ぎず、38.6%は支援を受けていない報告りからも、「気になる子」の多くが実際には支援されずにいる現状がうかがえる。今後、検討対象数を増やし詳細な描画項目の検討および、支援の実態も含めさらなる検討を行っていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課，通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果，2012
- 2) 埼玉県立総合教育センター特別支援教育担当，一人一人の教育的ニーズに対応した支援の在り方に関する調査研究 埼玉県立総合教育センター研究報告書 295，2004
- 3) 今中綾子，小学校1年生における早期の支援に関する研究 -担任の気づきを生かした通常学級でのユニバーサルデザインの取り組み-，大阪市教育センター研究紀要 201，2012
- 4) 小枝達也，発達支援と地域連携，小児保健研究，日本小児保健協会 50周年記念特別号，63 p 165-167，2004
- 5) 郷間英世，現代の子どもの発達の遅れとアンバランスさ，小児科，52(1)，73-80，2011
- 6) 総務省行政評価局，発達障害者支援に関する行政評価・監視〈結果に基づく勧告〉，2017
- 7) Goodenough, F. L., The Measurement of Intelligence by Drawings, World Book Co. N. Y., 1926
- 8) Harris, D. B., Children's drawings as measures of intellectual maturity, Harcourt, Brace & World Inc. N. Y., 1963
- 9) 小林重雄，グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック，三京房，京都，1977
- 10) 落合利佳，大阪大谷大学教育学部 幼児教育実践研究センター紀要 5, 1-10. 2014
- 11) 近藤智栄美 LD およびその周辺の子どもの人物画，臨床 描画研究，13, 57-70. 1998
- 12) 小林重雄，グッドイナフ人物画知能検査の臨床的利用，三京房，京都，1989
- 13) 是枝喜代治・東條吉邦 自閉症児の身体意識能力の特性：運動模倣と人物画の評価から，国立特殊

通常学級に在籍している気になる子の人物画描画特徴と推移

教育研究所分室一般 研究報告書：自閉性障害のある児童生徒の教育に関する研究, 7, 65-70, 2004

- 14) 渡邊純, 発達障がい者・児の人物画の類型化についての研究, 塚本学院教育研究補助費 研究成果報告集 18, 66-17, 2011
- 15) 日本精神神経学会監修, DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院, 東京, 2014

付 記

尚、本研究は JSPS 科研費 26381344, 26282204 の助成を受けたものです。